



新連載「新しい海辺づくり」が始まります。将来の豊かな海辺づくりを目標に、過去に学び、今に取り組むために必要なことを、様々な方とともに紹介していきます。

具体的には、海の自然環境、海に関する法制度、社会、歴史、環境技術や、海辺にかかわる人々のことなどを取り上げ、できる限り海辺の現場から報告したいと思います。今回は、その第1回、まずは、「連載にあたって」編です。みなさん、一緒に海辺にかけましょう。(上月康則)

日本は海洋国

先生(以下「T」): やぁI君、今年度から「海について考える」新しい連載を始めることにしたよ。

学生(以下「S」): えっ、テーマが海ですか……、海って私にはちょっと遠い存在なんですけど。

T: 現実には決してそんなことはないんだよ。日本は国土は小さいけど、海を含めると決してそんなことは言えない。水産資源や鉱物資源などの資源の探査と開発の権利がある排他的経済水域(EEZ, Exclusive Economic Zone)の広さは、なんと世界6番目で、これに陸を含めた面積でも世界9番目なんだよ(表)。また現在も貨物量の99%以上を海運が担っている。日本が海を様々な利用し、海から恵みを得ている「海洋国」であることは今も昔も間違いはないんだ。

遠い海辺

S: そういわれてもピンと来ませんが、海に囲まれているといっても、船に乗ることもあまりないし、海には海水浴、潮干狩りぐらいで年数回行く程度かな。それに彼女もいないから夕日が沈む海に行くこともないし……。

T: そんな彼女の話は横においても、人々の海への意識が希薄になってしまっていることについて

表 わが国の海の大きさ

順位	EEZ	(km ²)	EEZと領土	(km ²)
1	アメリカ	11,351,000	ロシア	24,641,873
2	フランス	11,035,000	アメリカ	20,982,418
3	オーストラリア	8,148,250	オーストラリア	15,835,100
4	ロシア	7,566,673	カナダ	15,583,747
5	カナダ	5,599,077	ブラジル	12,175,831
6	日本	4,479,358	フランス	11,709,843
7	ニュージーランド	4,083,744	中国	10,476,979
8	イギリス	3,973,760	インド	5,559,733
9	ブラジル	3,660,955	日本	4,857,193
10	チリ	2,017,717	ニュージーランド	4,352,424

は、考えてみないといけないな。

S: そうですね、港は立ち入り禁止になっているところが多いし、船着場もコンクリートの護岸で、親しむといった感じはしませんよね。また工場が海辺との間に立ちはだかって、私たちの町に海辺があることに気付いていない地域もあると聞いていますよ。

海洋基本法

T: 確かにそれは深刻な話だけど、海に関する社会状況もどんどんと変化しているんだよ。例えば、君は「海洋基本法」というのを知っているか？

S: 基本法って、“それぞれの行政分野で、「親法」として優越的な位置にあって、その分野にかかわる法律や行政を指導・誘導する役割がある法律”だと大学で習いましたけど、その海版ってやつですか？日本は島国だから、基本法は昔からあるのでしょ？

海辺の開発

T: いやいやそれが昨年2007年4月にようやく制定されたんだ。今までは、日本の海に関する外交、経済、環境など様々な海洋政策海の行政は、8つの省庁機関が分担し、やってきたんだが、それらを一元化する法律、機関(総合海洋政策本部)がないと不都合なことが色々出てきて、海洋基本法制定へとなった。これから基本計画に基づいて、新しい海の施策が展開されると思うので、期待しよう。

S：わかりました。私は防災とか環境問題に興味があるので、海洋基本法の動向にも注意してチェックしていきたいと思います。

T：新しいトピックスと同時に、海辺がどうしてこのような形になったのかを知っておくことも大切だよな。

S：経済発展や防災を目的にした開発といったことでしょうか？

T：海辺の形は人と海とのかかわりの歴史そのものなので、それを学び、理解するということは、これからの海辺の環境を考える基礎になるはずなんだ。海辺にあるものとしては、物流拠点となる港湾が代表的なものだが、下水処理場とか、廃棄物の最終処分場といったものが、なぜ海辺に多くあるのか？考えてみるのもいいと思うよ。

自然再生

S：はい、面白そうですね。そういえば、自然再生っていうのも一時話題になりましたが、今どうなっているのでしょうか、先生。

T：自然再生推進法が制定されて、わが国の主な沿岸域である東京湾、大阪湾、有明海、瀬戸内海、伊勢湾などでは自然再生、環境再生の取組みが始まっているんだ。失われた藻場、干潟を取り戻すための事業や、溶存酸素が不足する貧酸素化や無酸素化を解消しようという取組みも各地でしているので、そういった取組みや新しい環境技術についても紹介していこう。

温暖化の影響

S：地球温暖化の問題もまさに海の環境の問題でもありますね。地球規模の話を一われると困りますが、身近な海にも変化は現れているのでしょうか。

T：サンゴが本州太平洋沿岸を北上しているという話は聞くなあ。他にも地球規模の話では生物多様性や外来種の問題もあるよ。新・生物多様性国家戦略が制定されているけど、海の絶滅危惧種の生物については、ほとんどわかっていないんだ。内湾の港の護岸には外来種のムラサキイガイが一面を覆っているように、陸域よりも沿岸域でははるかに深刻だと思うよ。

海辺づくりの活動

S：そうですか、知りませんでした。しかし、最近では海辺でもNPOなどの市民団体の活動も活発

になってきていますよね。

T：地域の再生・活性化、地域づくりの核として各地の海辺が今注目されているね。高度経済成長期から地域の海辺を守ってきた人々の話はよく聞いておいた方がいいでしょう。また海の漂着ゴミのことは古くからあるけど、新しい問題でもあるんだよ。全国規模で活動がされてるけど、なかなかゴミはなくなるいな。環境教育の面では、小中高等学校では、こういった地域の海辺のことを教育教材に活用し、自分たちで守っていこうということも各地でされてるよ。さらに地域や環境のことを学ぶ体験型観光のエコツーリズムについては法律（エコツーリズム推進法）もできていて、もう成功している地域もあるんだよ。おそらく、これからの高齢化社会では、「福祉の海辺」のような社会的要請も大きくなっていくと思うんだけど、どうだろうか？

S：学生の私にはなんだか難しい話になってきました……。

漁業や海産物

T：I君、そう言うな。海の幸を味わうという話題なんかどうだ？国民の食の安全への関心が高まっているが、海の幸の安全、安心はどうなっているんだろうかね？地産地消や、フードマイレージなんていう食料と環境負荷の関係が話題になってるけれど、本来、わが国の内湾は豊かな海といわれていたんだが、大阪湾、瀬戸内海などでの漁業はどうなっているのだろうか、一緒に調べてみないか？

S：先生、わかりましたよ！各地の海辺の幸の食べ歩きをするんですね。

海の博物館

T：いやいやそればかりでは……。各地の海の博物館も訪ねてみたいと思っているんだが。

S：了解です、それも付け足しておきましょう。

T：調子が良すぎてちょっと心配なんだけど。私たちの世代による新しい海辺づくりを、私たち自身で考えていく必要があるって、そのためには海辺の歴史、法律、科学技術、自然のこと、そして人と自然のかかわりを、現場で学ばないといけないと思っているんだ。

上月康則（徳島大学大学院）
中西敬（徳島大学非常勤講師）